市川のまち 地名の由来

«No.13»

慈潭和尚が火定を行った場所と伝えられる地にある「お経塚」

新井

真水湧き出す〝新たな井戸〟

いまから四～五百年前の江戸川河口には、たくさんの砂州が広がっていました。そうした砂州は徐々に開発されていくのですが、この開発の苦心談が、いろいろなかたちで伝説化され伝えられています。そうした話の中に、「新井」の地名の起こりに関するもの、また、「お経塚」の話があります。

「新井」の地名の起こりについては、次のように伝えられています。

それは、欠真間の住民たちが新しく潮除け堤を築いて、耕地の開拓にあたったのですが、まわりが海であるため真水に恵まれず、苦労の日々が続きました。この様子を見た西船にある宝成寺の住職、能山（のうざん）和尚は、村人のためになんとか真水が得られないものかと、観世音菩薩に祈願しました。すると、お告げがあって、新たに井戸を掘ったところ、真水が湧き出したというのです。喜んだ村人たちは、早速その井戸を「新井」と名づけました。それが、やがてこのあたりの地名になったというのです。

元和二年（一六一六）、能山和尚の徳に対して村人たちはお堂を建て、能山和尚を迎えて開山としました。これが、新井寺の起こりです。

このことがあってから百年近くたった宝永年間（一七〇四～一七一一）のこと、行徳一帯は凶作に見舞われ、さらに悪疫が流行しました。このため、人々の生活は不安と混乱に陥り、秩序が乱れていきました。

この状態を見るに忍びず、新井寺の第四世慈潭（じたん）和尚は、観世音菩薩の化身である秋葉権現を遠州（静岡県）から勧請して、新井寺の境内に祀りました。

やがて、その霊験が現れて悪疫はおさまり、作物も実るようになったといいます。凶作と悪疫から村人を救った慈潭和尚は、村人の尊敬を受け、生き仏として仰がれました。

慈潭和尚は、さらに自分の身を捨てても津波や洪水から村人を守ろうと、海辺から蛤の貝殻を集め、これを清めて大般若経を一字ずつ書き写し、この貝殻を土中に埋めて塚をつくり、その上に座禅をくんで、自ら火定（念願達成のため火中に身を投じて死ぬこと）を行って果てたと伝えられています。この地が、今日に残る「お経塚」です。

次回は「国府台」を予定しています。

◇

前回「八幡」の記事の上段十八行目に「八幡の地名の起こりは……」とあるのは、「八幡神の起こりは……」の誤りです。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）